

家族・愛

高橋 フミ子

風は唸りながら夜の中空を渦巻いている。

その風のような 不気味な重みが心の中にまで吹きすさんで、僕は 痛いような不安を感じた。

この心を刺す不安に、生きているのが怖いと思っている。

しかし、中学1年生の僕博行と、小学4年生の弟和彦に対して、親としての責任を深く感じる母さんの心の重圧は、もっともっと重大なものだと僕は思う。

会社へ行くと定時に家を出る父は、毎晩帰宅するのは十一、十二時ごろで、僕が眠った後に帰ってくる。だから和彦は一日父さんの顔を見ることがない日もある。

そんなある日、母さんは

「お給料日が二日過ぎたわ。生活費をいただける？」

と、父に屈託なく声をかけた。

しかし父は黙って、朝食を摂っていた。

「あなた？」

母さんは訝しげに父さんを見た。

結局、父さんは生活費について一言も言わず家を出た。

「どうしたのかしら。」

母さんは呟いていた。

その日をきっかけに、父さんは母さんに生活費を渡さなくなった。

それから二年が過ぎて、今、母さんは近くのスーパーマーケットで働いている。開店十時から和彦が学校から帰る三時まで自転車で通っている。父さんは、相変わらずお金を入れてくれない

のだ。

僕は、父さんは本当に会社に行っているのだろうかという疑問に思ったので父さんの会社に電話をした。

父さんはちゃんと電話に出て

「何？どうした！」

と父さんの声に、僕は働いているんだと安心して黙って電話を切った。

ちゃんと働いているんだ…給料はもらっているんだと僕は思った。

けれどそれならどうして母さんに生活費を渡さないのだろうかという疑問がわいた。

父さんはお金を何に使っているのだろうか。夜遅くまで働いているのだからお給料はたくさんもらえるはずだ。

父さんはいったい何をしているのだろうか。

僕は、母さんが可哀想でならない。

ある日お風呂に入ろうと、階段を降りると台所から

「子供の将来も考えてください。」

「私のどこか、何か気がいらなくて生活費をくれないの？」

と母さんの抑えた声が聞こえた。

父さんの返事はなかった。

返事をしない父さんに母さんの気持ちは苛立ったに違いない。

母さんが悪いのではないよ、と僕は思った。

父さんは、心の中で僕たちを捨てたのだろうか。

そうなのだ、家族を捨てたのだ、と僕は思った。

父さんがボクラを捨ててから母さんは僕たちのために母さんのすべてを注いでくれてる、と思った。

家事とパートタイムの仕事と、そして僕と和彦が夕食を済ませ、ほっとする時間もなく母さんはいつ帰るか分からない父さんを待っている。

ある日、母さんは父さんに

「私があなたの携帯に電話をしても出てくれないのはどうして？」

私は夕方六時を過ぎるころになるとあなたが間もなく会社から帰ってくると思うの。八時ごろになると、どうしたのかと心配になるの。十時を過ぎるとこんな世の中だから、あなたの身に何か起きたのだろうか、事故にあったのではないかと、たまらなく怖くなるの。

お願い何時に帰るかせめて無事にいることを知らせてほしいの。夕食を食べたなら食べたと知らせてほしい。私毎日あなたの食事をテーブルに用意して待っているのよ。知らせてくれれば台所は片付くの。携帯を持っているのだから夕食食べたの一言で無事であることも分るわ。知らせてください。」

と切実な声で頼んでいた。

ある夜は、

「あなたにとって、博行は何？和彦は何？私はあなたの何ですか。あなたにとって家族は何なのですか。子供たちは成長していくわ成長と共にそれなりに金銭も必要になるわ。子供たちが大人になって結婚した時安定した幸せな人生を生きてほしいと思うでしょ。それにはそれなりの助けが必要だわ。子供たちに行きたい学校に行かせてやれるように、子供の将来のために親としての責任があると思うの。」

と母が泣いている様子も伺えた。

家族の安らぎと平和を考える母さんの必死さが、僕の胸に迫って来て僕は涙が出て来た。

僕は母さんが泣いている姿を思い浮かべながら、父さんは母さんが働いたお金で食事をしているのに夫として心が痛まないのか、よく平気で食事ができると、言ってやりたかった。

でも、子供が父親に盾突くことを母さんは好まないのだから、僕は母さんのために我慢した。

僕たち家族はこれから先どうなるのだろう。

不安でたまらなくて、僕は浴室のドアを閉めると二階への階段を上り、和彦の部屋のドアをノックした。

「お兄ちゃん？どうぞ。」

屈託のない和彦の声に部屋に入るなり、ベッドの入ろうとしている弟を抱きしめた。

しっかりと抱きしめた。

「和、お母さんは仕事と家のことで大変だと思わないか。」

「思う。」

和彦は、兄の涙に心に傷を負うほどの悲しみを受けた。

「お兄ちゃん、思うよ。」

和彦は労わるように僕に言った。

「お父さんの分まで頑張ってくれるお母さんを助けてあげよう。僕たちにできること何かしてあげよう。お母さんが少しでも楽になるように。そうしたら、お母さんの心に喜びが一つ生まれる。その喜びは、お母さんを幸せにするとと思わないか？」

「ウン、お母さん、辛そうにしていることがあるもの。」

「和、和とお兄ちゃんが、お母さんの喜びと幸せを作ってあげよう。そうでないとお母さんがあまりにも可哀想。お母さんの力の元になっているのは和と僕だから、その僕らが母さんの心を支えなければ母さんの子供とは言えないと思う。和、僕らは母さんの子供だから母さんを大切にしようね。」

僕は、和彦を抱きしめた両手を解きながら和彦の目をしっかりと見つめた。

「ウンお兄ちゃん、今夜は僕のベッドと一緒に寝ようよ。子供の時みたいに。」

「いいね。」

和彦は部屋の電気を小さくして、僕がベッドに入りやすいように上布団を持ち上げた。

次の日の朝、母さんが朝食の用意で台所に立っているとき、僕と和彦は笑顔で台所の入り口から

「お母さん、おはよう。」

と、弾む声で呼びかけた。

「おはよう、早いね。」

「お母さんが、お兄ちゃんと僕を起こす手間をなくしてあげるね。」

「ありがとう、助かる。」

お母さんの笑顔を背に僕はトイレ掃除、和彦はお風呂の掃除に取り掛かった。僕は初めてトイレの掃除をしながら、母さんへの暖かな優しい感情が、膨らむのを感じた。

僕と和彦のために物事を一心にしてくれる母さん、母さんの喜ぶ顔が浮かんで僕は幸せを感じた。

トイレ掃除を終えた僕は和彦のお風呂掃除を手伝って浸りそろって台所に行った。

「お母さん、トイレとお風呂の掃除は済ませたからね。」

「本当、助かるわ、ありがとう。」

「僕たちのできることはやるからね。」

僕は母さんがよそってくれた御飯茶碗を受け取りながら母さんを見た。

「ありがとう、嬉しいわ。」

母さんは、本当にうれしそうに僕と和彦に笑顔を向けた。

そんな中、父さんは新聞を開いていた。

僕たちに関心はないのだろうか。

ただ、新聞をパサパサとめくっては目を通していた。

僕は、僕たちに全く関心を向けない父さんを見ると胸の中に冷たい棘が刺さってそれが燃え立つような不満になった。

そして父さんを嫌いだ、と思った。

僕は、父さんがいなければ母さんは楽だと思った。

父さんから苛立ちを受けることもなくなる。

何時に帰るか分からない父さんを待っていることもないからだ。

母さんは、夕食が終わって台所を片付けて、その後眠りたい時間に眠れるのだ。

父さんは、僕たちに心がなくなったのになぜ僕たちといるのだろう、そう思いながら僕はじっと父さんを見ていた。

「博行、ご飯を食べなさい。冷めてしまうわよ。」

母さんは、静かに僕の気を引いた。

「はい。」

僕は母さんを見た。

母さんは、悲しそうな目で僕を見ながら頭を左右に振った。

そんな目でお父さんを見てはだめよ、と言っているようだった。

僕は、母さんに頷いて見せたが母さんの優しさが切なかった。

母さんだって父さんを許せるはずがないのに…。

冬休みは僕と和彦がうちにいるので、母さんは僕たちのお昼の心配もしてくれる。

そして、お願いね、と自転車に乗って仕事に行く。

僕を和彦は、台所と続きの居間のコタツの宿題をする。

和彦は宿題が終わると、本を読んだり何かしら遊んでいる。中学生の僕は、勉強の目的があるので午前中は和彦の相手にならなくて可哀想だけど勉強で過ごす。

午後は和彦の相手をして家の横の通りでキャッチボールをしたり、バドミントンをして遊ぶ。

そうしていると、母さんが自転車で仕事から帰ってくる。

母さんは、僕たちにおやつを用意してくれて、自分は働いているスーパーマーケットから買ってきたものを冷蔵庫に分け入れて夕食の支度に取り掛かった。

僕は、おやつをコタツに持って行って、それを食べながら、開けたままの教科書に取り組んだ。

和彦は楽しそうに語りかけている。

冬休みは、こうして毎日が平和だった。

ある日、冷え冷えとした玄関で、母さんは出勤する父さんに靴ベラを渡しながら、

「今日も遅くなるの？夕食うちで食べないようだったら連絡してくださる？」

二階へ行こうとしていた僕は母さんの後ろで父さんと母さんの様子を成り行きで見っていた。

「連絡？めんどくさいなあ。連絡連絡うるさいよ。心配するなら勝手にすればいい、面倒だ。」

「え？」

母さんの短い驚きの声。

僕も父さんの言葉にショックを受けた。

「あなた…。」

母さんの声は怒りとも悲しみともつかない震え声だった。

父さんは玄関を出た。

「お父さん。」

僕は、お母さんのサンダルを突っかけて玄関を出て父さんを追った。

そして父さんの前に立ちはだかつて父さんの手首を握った。

「面倒だなんて。お母さんの心を面倒だなんて。お母さんを楽にしてあげてよ。父さんが家で食事をするかしないか分からないから、お母さんは毎日毎日お父さんを待っているんだよ。お父さんの夕食が要らないと分かれば、お母さんは台所を片付けて心が楽になるんだよ。お父さん、もしお父さんとお母さんの立場が逆だったらと考えてみてよ。」

僕は必死で父さんを見上げて言った。

「お父さんなのに冷酷だよ。残酷だよ。お父さんは家族を守るべき人なんだよ。家族を保護して幸せにするべき立場なんだよ。そうしていれば家族から信頼されて家族は自然にお父さんに敬意をもってお父さんを中心に僕たちは生活すると思う。でもお父さんはお母さんや僕たちの気持ちを無視して、踏みにじっているよ。」

父さんは僕の手を振りほどいて黙って歩き出した。

僕は、父さんの遠ざかる後姿を見送りながらぷつぷつと息子としての父さんへの気持ちが切れる音を聞いた。

そうか、分った。もう終わりなんだと僕の気持ちを父さんの背中に投げかけた。

家に帰ると、母さんは玄関に打ちひしがれたように座り込んでいた。

面倒だ、と言った父さんの言葉は母さんを抛り出したのも同然だったのだ。

父さんの言葉は、母さんの全身の力を打ち砕いていた。

母さんは両手で顔を覆ってうずくまっていた。

「お母さん、もういいよ。お父さんのことはもういいよ。心配する必要ないよ。お父さんは、ただ僕たちのことは面倒なんだ。お父さんの言葉、ものすごくショックだよ。お母さん、今日仕事休んだら？」

僕は母さんの横に座って母さんの背中を撫でた。

「大丈夫よ。博行ごめんね。心配かけるわね。」

母さんは、ゆっくりと立ち上がった。

母さんは変わった。

母さんは、父さんに背中を向けたことが僕にもはっきりとわかった。

父さんの食事、洗濯と必要なことはすべて行っていたが会話は一言もなくなった。

夕食も父さんのことは心配しなくなった。

僕と和彦と母さんの夕食を終えると、台所はきちんと片づけられ今まではテーブルの上にあった父さんを待つ夕食も残されることはなくなった。

母さんは入浴を済ませると休んでしまう。

僕ももう父さんを気遣う気持ちを失ってしまった。

朝食のテーブルでも父さんに声をかける人がいなくなって父さんは、独りぼっちになってしまった。

和彦と僕と母さんは学校のこと、先生のこと、友人のこと、母さんのスーパーマーケットでの出来事を楽しく話し合った。

父さんが、僕たちの輪の外にいる、そんな生活が続いた。

僕は、父さんのほうを見ることもしなくなった。

父さんはそこにいるというだけの存在になった。

そんな生活の中、濃淡の美しい緑の春が過ぎて、焼けつくような太陽の夏も過ぎて、日の光も傾き木々の影も長引いて涼やかな風の訪れとともに秋の季節になった。

そんな秋のある日僕たちが、夕食のテーブルに着こうとしているときに父さんが帰ってきた。僕も母さんも意外な出来事に驚いてただ父さんを見た。

父さんは、テーブルの上に大きなケーキの箱を置いて母さんに黙って封筒を差し出した。

母さんは何？と言いたげな表情できょんととして父さんを見た。

「ごめん、悪かった。」

父さんは殺風景に言った…一言。

母さんも僕も、突然の父さんの変化に驚いた。父さんは優しい父さんになったけれど僕は許せなかった。

許せないでイライラしている僕に母さんは言った。

「人間て、とても弱い面があるのよ。その人の弱さがその人を誘惑するの。でもその誘惑に勝つ人もいるわ。お父さんは自分の誘惑に弱い、可哀想な人なのよ。だからパチンコに夢中になってしまったんですって。お父さんは言ってたわ。」

博行の言葉お母さんを楽にしてあげてよ。お父さんは家族を保護して守って幸せにするべき立場なんだよ。博行あなたはそう言ったんでしょ。その言葉がお父さんの心を激しく揺すったんですって。お父さんは、自分のことしか考えていなかったと後悔してたわ。お父さんも変わってくれたでしょ。お給料もちゃんとくれる、私たちと一緒に食事もしてくれる暖かなお父さんになったでしょ。だからお父さんを許してあげましょう。ゆっくりでいいからあなたにも辛い思いをさせたわね。お母さんは博行と和彦の優しさと思いやりと暖かさと愛情をいっぱいもらってたわ。だからお母さんはとても幸せだったわ。博行ありがとうね。」

母さんは僕を抱きしめてくれた。僕はお母さんの両腕の中でお父さんを信じてもいいのかなあと言った。

「信じてあげましょう。あなたと和彦のたった一人のお父さんなのよ。最近のお父さんは日曜日にはあなたたちと一緒にいてくれるでしょ。そのお父さんを信じましょう。きっとお父さんはものすごく苦しんで反省したと思うの。信じてあげましょう。」

母さんの家族に対する愛情が今まで以上に温かく深くなったことを僕は感じた。

そうだからこれからが大切なんだ。

行動を改めるには父さんは母さんが言うようにものすごく苦しんだんだ、苦しんだ上で僕たちのもとに帰ってきてくれた父さんを僕は尊敬する。家族の幸せって家族一人一人がその立場をしつかりと家族の幸せを思って行動することなんだと僕は思う。

(コリント第一 13:1 - 8) …たとえわたしが人間やみ使いの[いろいろな]ことばを話しても、愛がなければ、音を立てる[一片の]しんちゅうか、ただ鳴り響くシンバルとなっています。²そして、たとえ預言[の賜物]を持ち、すべての神聖な奥義とすべての知識に通じていても、また、たとえ山を移すほどの全き信仰を持っていても、愛がなければ、何の価値もありません。³そして、ほかの人たちに食物を与えるために自分のすべての持ち物を施しても、また、自分の体を渡して自分を誇れるようにしたとしても、愛がなければ、わたしには何の益にもなりません。⁴愛は辛抱強く、また親切です。愛はねたまず、自慢せず、思い上がらず、⁵みだりな振る舞いをせず、自分の利を求めず、刺激されてもいら

立ちません。傷つけられてもそれを根に持たず、⁶ 不義を歡ばないで、眞実なことと共に
歡びます。⁷ すべての事に耐え、すべての事を信じ、すべての事を希望し、すべての事を
忍耐します。⁸ 愛は決して絶えません。…

家族・愛

<http://p.booklog.jp/book/109768>

著者：高橋 フミ子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jwkokoro/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109768>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109768>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ